和算漫錄（九）

村林專之助

1、毛利重能の算術書は從來僅かに斷片に依つて云爲せられて居たものであつたが、最近に至り完本が發見せられ、既に「古典全集」中にも收められて發表せられたのである。該書の目錄は左の如し。

八算同發一　見一同發一　歸一倍一同發一　四十四割一
四十三割一　小一斤聲一　糸割　三　掛て吉分三
絹布割　三　升積算十二　金割算　四　借銀借米四
米賣買　六　檢地算　七　普請割　五　町見樣　二
以上十六ケ條小數五十五

而して末尾に「……攝津國武庫郡瓦林之住人、今京都に住、割算之天下一と號者也　元和八年初春　重能○□」とある。（以下二行略）

（說明）八算とは二、三……九を以て割るわりざんである。同發は「おなじくおこり」と讀むのである。即ち八算の算法（割算九九等）の理由を說明することを表すものである。以下の同發も皆斯る意味に解してよからう。中略。四十四割は四十四にて割るときの割聲である。之は金十兩の目方四十四匁として兩がへに入用、塵劫記にもある。四十三割も同樣。小一斤聲とは十六にて割るときの割聲である。糸割、絹布割、金割、普請割の「割」は計算の意味である。掛て吉分は掛てよくわかる（吉分）と讀むならん。（二十五除の代りに四を乘ずるの類）町見樣は「ちようのみやう」と讀む。題目の下の一、三、十二等は細目の箇條の數である。終りの小數五十五は其の合計である。

左に此書の內容の一二を紹介しよう。

八算の次第

二一天作五、逢二進一十、……逢九進一十。（九々中略）右八算のこゑのごとく割申候、若し聲をわすれたる時二のだんに二一天作五と云は十匁の物二つに割り候へば五匁となる、又三のだんに三一三十一といふは十匁を三つにわり候へば三匁づゝにして一匁はあまり申候によりて三十一と云也、四のだん、五のだん、六の段、七のだん八のだんといふとも此心也、但八の段の時七匁有を八七八十六と云時に、八十七か八かとわすれ申候時八を八々六十四といふ時に、七匁に六分たり不申候、此六分を下へさげて又下算くわへ八のこゑにて割申候、いづれの段もかくのごとく仕候也。

（所感）數學の說明は、綿密に書かうと思つて筆を取れば冗長となるばかりでなく、却て分りにくゝなるものであるから、其の要所々々を細述し、其の他は略して讀者の推察判斷に委す方がよい。といふ事は誰しも知つて居ることであるが、然し取捨の工合はなかなか六かしいものである。此の重能子の說明文の中にも多少行文上に議すべき所もあるやうであるが、大體として好き一模型であつて大に數學教育者の學ふべき點があると思ふ。（以下次號へつゞく。澤田吾一氏　數學史講話より拔萃）

2、江戶錢湯風呂の始め

寬永十八年印本「そゞろ物語」に云く、見しはむかし江戶はんじやうのはじめ天正十九卯年の夏の比（ころ）かとよ。伊勢與市といひしもの錢瓶（がめ）橋（筆者曰く　錢瓶橋は今の常盤橋の內にありたり）のほとりに、せんたう風呂を一ツ立る。風呂錢は　永樂一錢なり。皆人めづらしき物哉とて入給ひぬ。されども其比は風呂ふたんれんの人あまた有て、あらあつの湯の雫や。息がつまりて物もいはれず煙にて目もあかれぬなどゝ云て、風呂の口に立ふさがり、ぬる風呂をこのみしが、今は町每に風呂あり。びた十五錢廿錢づゝにて入也云々。（山東京著傳　骨董集より）

夏深み草の名わかぬしげみ哉　心　敬
秋近し黃ばみかゝりし鮎の腹　其　考